

平成23年度発掘調査遺跡の紹介

柄目木遺跡

(阿賀野市大字下ノ橋字柄目木地内)

柄目木遺跡は、阿賀野川右岸の沖積地に立地します。一般国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、平成20・21・23年度に発掘調査を行い、古代（8世紀後半～9世紀中葉）と中世（13世紀後半～14世紀後半）の集落を発見しました。

古代の集落と中世の集落の間には、30cmもの間層（遺物も遺構も検出されない地層）が認められましたが、自然科学分析の結果等から洪水堆積物である可能性が高いことが明らかになりました。古代の集落が洪水堆積物に覆われ、その上に中世の集落が築かれたことが分かったのです。

また、中世の集落の上も、その間層と良く似た洪水堆積物で覆われていました。そして、この洪水堆積物の上から掘り込まれた遺構の年代が、放射性炭素年代測定によって14世紀ころであることが分かりました。すなわち、洪水堆積物の下に築かれた集落は13世紀後半～14世紀後半、上に築かれた遺構は14世紀後半であることが分かったのです。このことから、洪水災害が14世紀後半に発生したことが明らかになりました。また、興味深いことに、洪水堆積物の上に再び集落は築かれず、火葬に関する遺構のみが検出されました。洪水災害を契機に、土地の利用が大きく変貌したと考えられます。

このように古代～中世の間には、たびたび洪水災害に見舞われたことが分かりました。ところが、弥生時代～古代と近世においては、このような洪水堆積物は認められません。また、古代～中世においては、海岸線沿いに広がる新潟砂丘が急速に発達したと考えられています。砂丘が発達するということは、上流から押し流された土砂の量が増加したことを意味し、このことも洪水の発生を示す事柄といえます。

それでは、なぜ、古代～中世という限られた期間に洪水が多発したのでしょうか。砂丘が発達した一因として、山林の開発が挙げられています。古代に五頭山麓で窯業・製鉄が開始されたことで膨大な薪炭材が必要となり、それまでとは比べものにならない規模の山林開発が行われたと考えられます。結果、山林の保水力は低下し、洪水を引き起こしやすくなったのかもしれませんが。一方、近世以降は、窯業・製鉄の衰退に伴い山林の開発も収束し、かつ治水も進展したことで、当遺跡にまで及ぶような大規模な洪水が発生するリスクが軽減されたようです。

(加藤 学)



洪水堆積物の下から現れた古代の集落
(奥に見える山は五頭連峰)



洪水堆積物の下から出土した古代の土器
(須恵器の大半は五頭山麓産)

まちがみ 町上遺跡

(魚沼市大字大浦地内)

遺跡は魚野川に注ぐ水無川^{みずなしがわ}によって造られた水無川扇状地^{せんじょうち} (通称/八色原^{やいろはら})にある縄文時代中期から後期の集落です。かつての八色原は杉や雑木林の間に畑が散在していましたが、昭和40年から国営開拓事業が始まり、美しい水田に変わりました。この地に国道17号浦佐バイパスが計画されました。ここには周知の遺跡があり、平成16年の事前調査で縄文時代の集落を確認しました。平成23年5月から道路工事に係る4,300㎡を対象に発掘調査に入りましたが、発掘を進めると開拓事業による土地改変が予想より大きいことが分かり、調査面積を2,578㎡に縮小して、8月上旬に調査を終えました。

遺構は円形の竪穴住居4軒、掘立柱建物5棟、土坑・フラスコ状土坑27基などがあります。竪穴住居と掘立柱建物は縄文時代の小さな沢を挟んで、それぞれまとまっています。竪穴住居には、工事により掘り込みの壁が削られ、柱穴が円形に回るだけのものもありますが、石で築かれた(複式)炉の形から中期後葉と分かります。また、中期中葉の大木8b式土器が出土している例もあり、竪穴住居は概ね中期に造られたことが分かります。一方、掘立柱建物は、柱穴配置と出土土器から後期と考えられます。

遺構分布から見ると、遺跡の中心は西側の水田(写真の右側)にあることが分かりました。土器は縄文時代中期前葉(約4,500年前)から後期前葉(約3,500年前)までありますが、遺構から出土する土器は、中期終わりから後期初頭が中心です。石器は石鏃^{せきぞく}、磨製石斧、打製石斧、石皿^{すりいし}や磨石^{さんきやく}、三脚石器^{ばん}、板状石器^{せきぼう}、石棒などがあります。また、土坑の焼土を洗ったところ、鮭の歯や動物の骨が多数見つかりました。今は発掘資料の整理途中ですが、魚野川中流域の縄文時代集落の一端を明らかにしたいと思います。(田海 義正)



八色原の扇状地と調査地 後ろは越後三山(北西から)



竪穴住居(空中写真)



フラスコ状土坑に伏せられた土器



中期・後期の土器と石器

埋文コラム

須恵器横瓶の作り方

たきでらようせきぐん おおぬきようせきぐん
滝寺窯跡群・大貫窯跡群（上越市）
は8世紀末～9世紀前半の須恵器や
土師器の窯で、出土品のうち1,012点
が平成22年度に県指定されました。

須恵器には杯・杯蓋などの食膳具、
壺・甕・横瓶などの貯蔵具のほか、
硯・仏具などがあります。今回はその中から横瓶の製作方法について解説
します。写真1右側の3点が横瓶です。壺や甕が縦長の卵形なのに対して、
横長の円筒形をした胴部が印象的です。横瓶は酒などの液体を貯蔵するの
に用いられました。

横瓶は回転台（ろくろ）を使って製作しますが、胴部の作り方に2通りの
方法があります。ひとつは回転台の上に粘土板を置き、そこから粘土紐を巻
き上げる方法、もうひとつは回転台の上に直接粘土紐を巻き上げる方法です。
前者はコップ状になりますが、後者は上下が開いた筒状になります。ちょ
うど回転台の上に細長い胴部の片側が接している状態です。なお、後の工程で
開いた部分を閉じますが、前者は片側を塞ぐので「片面閉塞」(図左列)、後者は
両端を塞ぐので「両面閉塞」(図右列)と呼びます。

次にロクロの回転を利用しながらなでたり叩いたりして
中央が膨らんだ形に整えます（写真2）。叩くときには開口
部から片手を入れて、器壁を挟んで手拍子をするようにしま
す。ただし、実際に手で叩く訳ではなく、内側の手にはキノ
コ形の当て具、外側の手には羽子板のような叩き板を持ち、
内側からキノコの傘に当たる部分で支えながら外側から叩
き締めます。当て具や叩き板には同心円や格子目のような彫
刻がされているため、完成した横瓶にはこの痕跡が模様の一
ように残ります（写真3）。

この後、片面閉塞の工程では、台に載せて下の面を叩き出
します（図5）。次に粘土の円盤で蓋をします（図6）。この
状態でロクロの回転を利用して表面を整えます。そして、ロ
クロから外して表面を叩いて整えます。再びロクロに載せて
口縁部を取り付ける部分を丸く切り抜き、口縁部を取り付け
ます（図8⑩）。

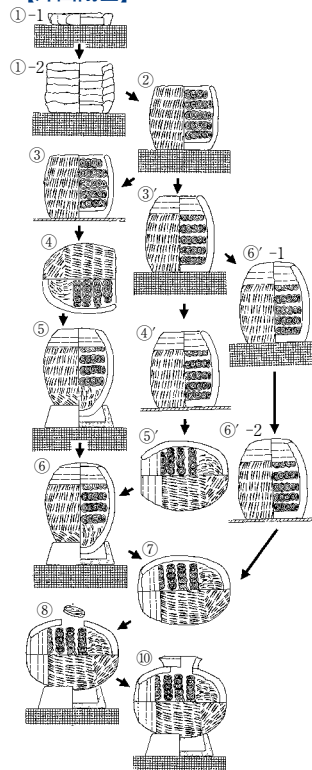
両面閉塞の工程では膨らんだ形になったところでロクロ
から外し、上端に粘土の円盤をかぶせて蓋をします。再び
ロクロの回転を利用しながら、なでたり叩いたりして接合部
を整えます（図4）。次に、蓋をした面を下にして台に載せ、
反対側にも蓋をします（図7）。この後、片面閉塞と同様に口縁部を取り付け
ます（図9⑪）。

横瓶は8・9世紀には北陸に偏在し、中でも両面閉塞で製作されたものは越中・越後に多く見られます。

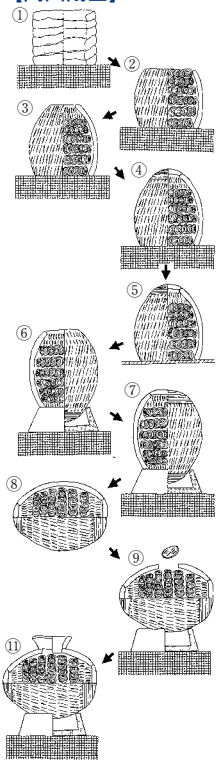
参考資料：春日真実 2001「横瓶の製作方法」『つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究会



【片面閉塞】



【両面閉塞】



横瓶の製作方法【春日2001】

保存処理室から

出土品や調査記録の保管・展示環境

事業団では、発掘調査によって見つかった出土品（土器・石器・木製品・金属製品など）のほか、調査の際に作成した図面や写真フィルムなどの調査記録、近年ではこれらを収録したマイクロフィルムやCDなど、多種多様な資料を保管しています。開発に伴う発掘調査では、調査終了後に遺跡が壊され、2度と同じ地点を調査することができないため、出土品や調査記録は壊される遺跡に代わる唯一の記録として大切に保存しなければなりません。今回は、これらの資料を未来に伝えるために、どのような環境で保管・展示しているのかをご紹介します。

資料が傷む原因 資料が傷む原因には、不適切な温度・湿度・光、生物被害、化学物質による汚染、災害、盗難・破壊行為、不適切な取り扱い・保存処理、怠惰な管理などがあります。私たちは、資料を永く未来に伝えていくために、これらの要因をできるかぎり排除していかなければなりません。

資料の管理 資料は、発掘調査単位で報告書掲載番号順、または出土位置・層位ごとに分類収納し、何処に何がどれだけ収蔵してあるのか、各種管理台帳を作成し、適切な環境下で保管しています。これにより、資料の紛失や劣化を防止すると共に、資料の閲覧や展示公開への対応もスムーズにできるようになっています。

温湿度の管理 資料は高温多湿や過乾燥により、カビの発生や褪色、保存処理材料の溶解、ひび割れなどの劣化を引き起こします。資料には、その材質に応じた適切な温湿度環境が提示されています。土器・陶磁器や石などはあまり温湿度を気にしなくてもよいのですが、木や紙、漆では20℃・相対湿度（RH）55～60%、金属では20℃・RH45%以下、写真フィルムは、白黒が18℃、カラーが2℃で、いずれもRH30%以下、で保管することが理想的です。事業団では、木・漆製品は、適切な温湿度に調整された特別収蔵庫で保管し、金属製品は脱酸素剤とともにパックし、無酸素・低湿度で保管しています。写真フィルムやマイクロフィルムは低湿度に保たれたキャビネット内に収納しています。また、土器・石器を収蔵している収蔵庫では、梅雨～初夏にかけて床が結露しやすいことから、大型除湿機を稼働させて湿度のコントロールを行っています。

照明の管理 資料に当たる光や紫外線、赤外線量が多くなると、資料は褪色や劣化を引き起こします。土器・石器・金属製品は、照明による劣化がほとんどないのですが、木簡などの文字資料や木製品、漆製品などは、比較的光に敏感な資料です。このため、展示する資料に応じて照明を少し暗くするほか、展示期間を数週間～数カ月と短期間に限定する場合があります。来年度には、展示室の照明を紫外線カットの照明に交換し、外光が入る展示ケースのガラスに紫外線吸収フィルムを貼る工事を予定しています。

防災対策 近年、日本国内では大地震や、地球温暖化による豪雨災害などが頻発しており、建物の2次利用が多い文化財収蔵施設では火災の発生も少なくありません。事業団では、中越地震の教訓から、土器が棚から落下しないよう、横滑り防止マットや落下防止柵の設置を行ってきたほか、毎年避難訓練を行い、災害発生時に持ち出す資料の確認と持ち出し担当者による搬出訓練を行っています。また、写真データを収めたCDは複数枚作製し、分散保管することにより災害に対するリスクを軽減しています。

資料を変換する 活用頻度が高いのに、長期間の公開に耐えられない出土品は、劣化防止のため、実物にそっくりな複製品（レプリカ）を作製し公開する場合があります。また、図面に用いる樹脂製の方眼紙や写真フィルム等は長期の保管に耐えられないため、マイクロフィルムに収録したり、デジタルデータに変換したりしてCDやDVDに保存します。ただし、これらの媒体にも保存期限がありますので、年限を決めて更新が必要です。（三ツ井朋子）



木製品を収蔵する特別収蔵庫



脱酸素剤による金属製品の保管



横滑り防止マットと転落防止柵

埋文インフォメーション

多彩な普及活動を終えて

体験学習

4～11月に埋蔵文化財センターへ体験学習や職場体験などで訪れた学校は、48校2,535人でした。今年度は、学校教育の一環として行う「体験学習」のほかに、児童会や市内地区公民館の行う催しにセンターでの体験も組み入れられたものが2例ありました。「勾玉作り」の体験を行った学校では、完成した勾玉を胸にかけた誇らしげな児童の表情が印象的でした。

「土器作り」は単に土器の形を作るだけでなく、乾燥後にセンターで焼成しました。焼成後の土器の変化に、体験した児童や保護者から感激のことばをいただきました。担当者としては壊れずに焼けたので、ほっとしています。学校行事の中では、夏休みに保護者の授業参観を兼ねて、児童と保護者が土器作りや火おこし・勾玉作りの体験を行った学校もありました。保護者からは、「普段とは異なる子供の表情を見ることができてびっくりした。」という意見が聞かれました。



「授業参観」での土器作り



勾玉作りの解説



勾玉の形を作る

中学校の総合学習でセンターを利用

近隣の金津中学校では、「総合学習」の一環として、当センターの展示解説や体験を取り入れた試みがありました。期間は10・11月の毎週水曜日午後2時間のカリキュラムを利用しました。学校で栽培した古代米を利用して、弥生時代の「米作り」について調査し、その成果を発表しました。

センターでは、実際の出土遺物を参考にして、古墳時代の甑・甕・壺などの土器を作りました。作った土器で、刈り取った黒米を炊くことはできませんでしたが、昔の人々のご飯の食べ方を具体的に学習しました。



土器の使用方法的説明



土器作り



土器を焼いている様子

その他の催し物

隣接する植物園・美術館などと協力して6月5日に行った「花ふるフェスタ」では、火おこしや勾玉作りに1日で280人の参加がありました。文化行政課が行った「親子考古学講座」や「まいぶん祭り」は今年初めての開催でしたが、親子そろって、勾玉作りや石庖丁による稲の穂つきなど普段できない体験を行うことができたこと好評でした。また石器作りでは石の矢じりの先端の細かい細工に関心が集まりました。



「親子考古学教室」展示資料解説



「親子考古学教室」勾玉作り



「親子考古学教室」土器作り

県内の遺跡・遺物76

くぼでらみなみ
久保寺南遺跡出土品 309点 (平成22年3月県指定)

(遺跡所在地：十日町市貝野字久保寺戊847番地ほか)

久保寺南遺跡は、長野県境に近い信濃川上流左岸の河岸段丘上に立地します。この地域は土器作りが開始された頃（縄文時代草創期）の遺跡が密集することで学史的にも有名です。県営ほ場整備事業に伴い、平成11年度に旧中里村教育委員会が発掘調査をしたところ、縄文時代草創期前半の生活跡である遺物集中地点17か所が検出されました。遺物には草創期に特徴的な隆線文土器と石器があります。

縄文時代草創期の遺跡から出土する土器の大半は小破片で、数量も少ないことが特徴ですが、本遺跡では破片数で1,500点、個体数で21個体の深鉢形土器が出土しました。また、元の形まで復元できるものが2個体あり、土器の器形や文様を知ることができます。さらに、土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定をしたところ、約15,000～14,000年前の値が得られ、縄文時代草創期前半の実年代を知ることができました。

石器も1,810点と多量に出土しており、石槍・局部磨製石斧・打製石斧・搔器・削器・有溝砥石（矢柄研磨器）・敲石などがあります。ほかにも本遺跡で石器製作が行われたことを示す接合資料が多数確認されています。接合資料は石器製作の過程で出た石屑をつなぎ合わせて割られる前の形に復元したもので、石器製作時の石の割り方が分かります。特に注目されるのは、縄文時代に先立つ旧石器時代の系譜を引く石刃剥離技術が使われており、伝統的な技術が色濃く残存している点です。縄文時代草創期には土器を伴わずに石器のみが出土する遺跡も多く、本遺跡のように、土器と石器の組み合わせが良く分かる例は県内では希少です。

上述のように、久保寺南遺跡出土品は隆線文土器と石器の組み合わせが分かる好例であるとともに、旧石器時代の石器技術が残存するなど、信濃川上流域における地域的特徴をよく合わせ持っていることから、縄文時代開始期の様相をよく示す重要な資料であるとして、土器157点、石器152点が県有形文化財（考古資料）に指定されました。

参考資料：『中里村文化財調査報告書第9輯 久保寺南遺跡』[中里村教育委員会2001]、『中里村史 通史編上巻（自然・原始・古代・中世・近世）』[中里村史専門委員会・中里村史編さん委員会1988]
資料提供：十日町市博物館



隆線文土器



石器

上段：石槍（1～3）、石槍の製作過程を示す接合資料（4・5）
局部磨製石斧（6）、打製石斧（7）
下段：搔器（8～10）、削器（11）
石刃剥離技術を示す接合資料（12・13）
有溝砥石（14・15）

埋文にいがたNo.78

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
TEL (0250)25-3981
FAX (0250)25-3986
E-mail: niigata@maibun.net
URL: http://www.maibun.net
印刷 株式会社ハイグラフィック